

岩木山麓における近年の土地利用変化

小 杉 国 守

I はじめに

山地が卓越するわが国では、山麓は重大な生産活動の舞台となっている。特に、1945年以降、食糧難打開等の問題解決手段として、高冷地、傾斜地、軍用地等に数多くの開拓が繰り返られるなど、経済の発達・進歩が高度の土地利用を推進させ、その時代に応じた土地利用がなされてきた（石岡，1969）。

本稿は、岩木山の東・南麓に広がる青森県岩木町を主に研究対象地域とし、戦後、岩木山麓の開拓が時代の要請に応じていかに進められてきたか、また、最近の土地利用変化とその要因について考察することを目的とする。

研究方法としては、国土地理院発行の5万分の1の地形図から作成した土地利用図、1995年農業センサス農業集落カードなどの資料の分析を主とした。

II 研究対象地域

岩木山は弘前市の北西にある鳥海火山系に属する成層火山で、標高は1625mである。この岩木山麓を、後長根沢を境として東麓と南麓に分け、その中で土地利用に大きな変化が見られた

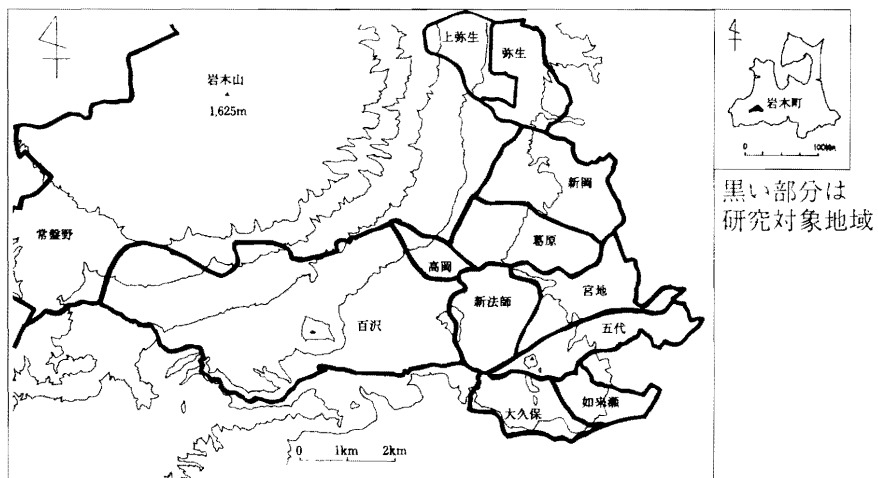


図1 研究対象地域

2000年世界農林業センサス 市区町村分割地図より作成

東麓は標高およそ100m～500m、南麓は200m～500mに位置する岩木町の集落に弘前市弥生を加えた地域を研究対象地域とする。東麓は500m～300mまではやや急傾斜を示すが、それから100mまでは緩傾斜となっている。南麓は500m～200mまで緩傾斜を示しており、東麓と南麓では地形的な面で異なっている。

また、この地域は、一般的に冬季はかなりの低温を示すが、いずれの山麓も7月を転機として急激に気温が上昇し、8月を頂点としてかなりの高温となる。年平均気温及び5～9月の平均気温はいずれも南麓よりも東麓の方がかなり高くなっている。降水量は比較的多く、東麓は最も多く県内の多雨地帯に相当し、山体に近づくにつれて、しだいに増える傾向を示している（横山、1965）。

Ⅲ 岩木山麓の開発の沿革

岩木山麓開発事業は、昭和32年に農業未開発基本調査の指定を受けたことに始まり、翌33年には、特定農地開発地域の指定、36年には国営開拓パイロット事業の基本計画が策定され、昭和37年9月から南麓地区の開発事業が着手された。昭和43年までには、工事費20億円で5,200haの開発を予定し、農地機械開発公団が20数台のブルドーザを入れて、整地作業を行った。計画では南麓1,207ha、東北麓4,009haでそのうち耕地2,500ha、防風林700ha、採草地1,200ha、土砂防止林390ha等が予定され、未開の地岩木山麓は、将来共同作業中心の酪農地帯として、一大規模を誇る近代農業地帯に生まれ変わる予定になっていた。結果としては、2,193haが開墾されて、幹線道路、支線道路、耕作道路、防風林などがつくられた。図2は土地利用の様子をa昭和28年、b昭和44年、c昭和50年、d昭和57年、e平成7年に分けて表し、その変化を示したものであるが、aとbを比較するとbでは畑が急激に増えていて、その付近の地域が開拓されたところであることがわかる。

表1 岩木山麓の開発の沿革

年 号	事 業
昭和38年	岩木山麓の国営開拓パイロット事業着手
昭和45年	米の生産調整開始
昭和50年	農村総合整備モデル事業の指定を受ける
昭和53年	水田利用再編対策第1期（55年まで）
昭和55年	新岡地区新農業構造改造事業完了
昭和56年	水田利用再編対策第2期（58年まで）
昭和59年	水田利用再編対策第3期（61年まで）
昭和60年	岩木山南麓地域開発基本計画策定（岩木町）

岩木町役場：「統計で見る町の姿」より作成

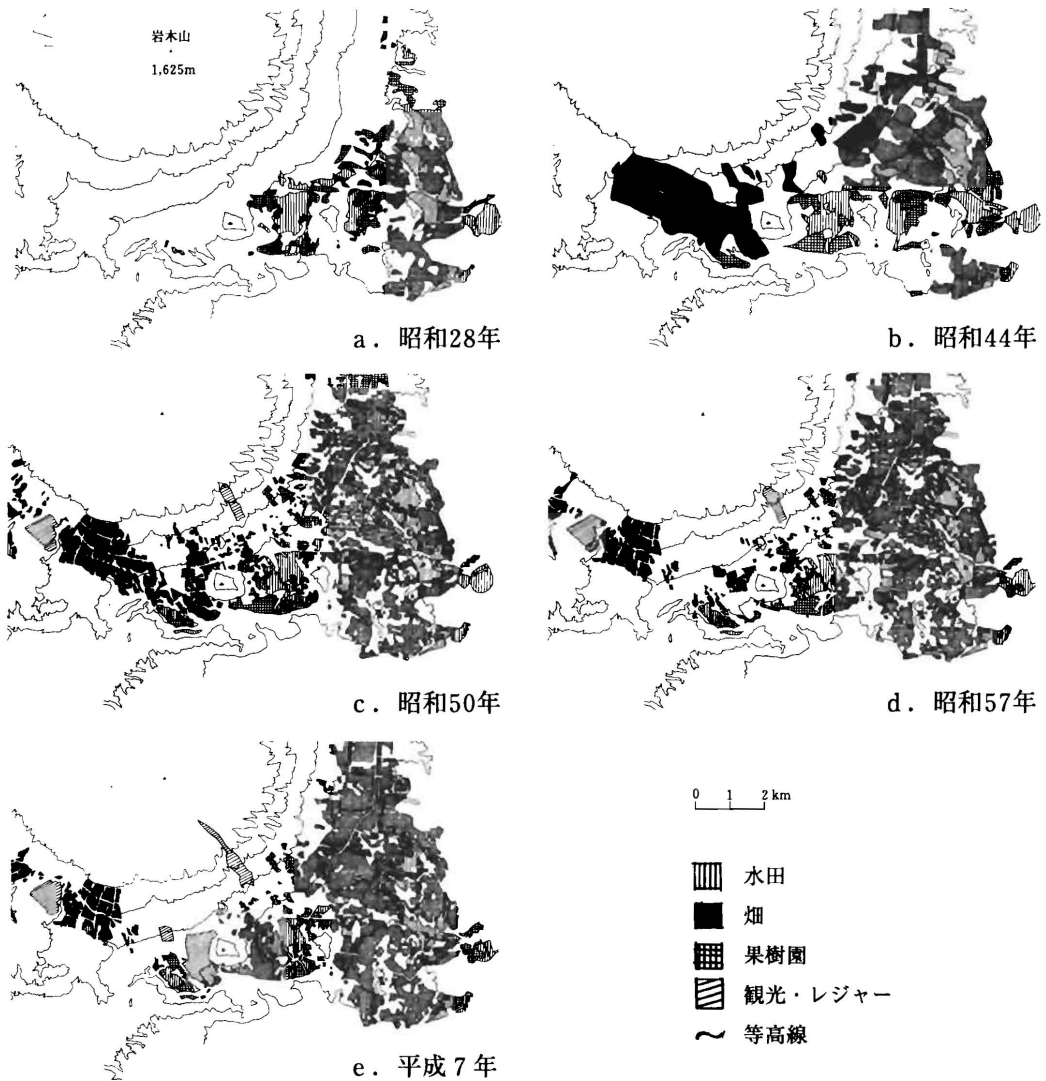


図2 土地利用の変化

国土地理院：「5万分の1地形図」より作成

昭和45年は、わが国農業史上初めてという米の生産調整がはじまった年である。生産調整の結果、岩木町では、水田の転作としてリンゴ園が経営されるようになった。図2のbとcを比較しても水田が減少しているのがわかる。昭和45年と50年では、総面積が144,180 aから163,353 aと増えているにもかかわらず、田の面積は、大部分の集落で減少し、合計でも47,350 aから40,924 aと減少している。これは、生産調整の影響から水田が減少し、その転作としてリンゴ園を経営する農家が増えたためだと考えられる。また、ミカンなど他果実の生産が増えてきたために、品種更新に対する農家の意欲が盛んになったことが総面積、樹園地の面積の増加につながったとも考えられる。

昭和50年、岩木町は農林省でおこなっている「農林総合整備モデル事業」の調査計画地区としての指定を受け、本格的な調査に入ることになった。「農林総合整備モデル事業」とは、これまでのように直接農業生産に関係のある農耕地の区画や農道など生産基盤整備事業だけでなく、豊かな生活環境づくりを基本にし、生産基盤の整備のほか、道路防災、安全施設の整備や集会所、児童公園、運動場など農村の環境基盤と環境施設の整備を総合的に行い、他の模範となる魅力ある豊かな農村をつくろうという事業で、昭和51年には事業実施計画を作成し、昭和52年から4年間に総事業費約10億円の工事を実施した。

昭和53年度からは、生産調整と転作が推奨される水田利用再編対策第1期(昭和53～55年)、第2期(昭和56年～58年)、第3期(昭和59～61年)が発足した。図2のcとdを比較すると水田が減少して果樹園が増加しているのがわかる。

IV 最近の土地利用と考察

平成7年、東麓は主にリンゴを栽培している果樹園が大部分をしめている。そのほとんどが、等高線100m～200mの間にあり、200m以上にもわずかだが見られる。水田も見られるが果樹園と比較するとだいぶ少なく、100m以下に多く見られ、200m～100mの間にほんの少し見られるが、200m以上には全く見られない。また、弥生いこいの村がある。南麓は果樹園、畑、水田が同じくらいになっていて、その他の森林や荒地が目立っている。畑は300m～500mの間に広がり、果樹園と水田は200m～300mの間にいくらか見られる。また、常盤野には青少年スポーツセンター、百沢には岩木山百沢スキー場、津軽カントリークラブゴルフ場、岩木山総合公園がある。以上のことから考えて、現在東麓は農業的な土地利用で、南麓は観光・レジャー中心の土地利用と言える。

このように土地利用の変化に影響を与えた要因のひとつとして東麓と南麓の気候の違いが考えられる。東麓は、気温が高く降水量も多くなっていて農業に適している。そのために、昭和45年からの生産調整の後も、水田から果樹園への転作がうまくいき現在のような農業中心の土地利用になっていると考えられる。一方、昭和38年の国営開拓パイロット事業で酪農、農業の中心として期待された南麓は、東麓と比べても気温が低く、自然条件が農業に適していないために農地がだんだん減少していき、温泉などを利用した観光・レジャー中心の土地利用に変化してきたと考えられる。

土地利用の変化に大きな影響を与えたもう一つの要因として、昭和50年8月の岩木山の土石流災害が考えられる。この土石流災害は、集中豪雨のために岩木山頂付近に降った雨が鉄砲水となったもので、特に百沢では被害が大きかった。そのために、今まで農地として開拓されてきた地域が農地に適さなくなった。その地域とは、図2でcとdを比較したときに、畑が多く

減少している地域である。この南麓の土地利用について、昭和60年に自然環境と温泉などの観光資源を生かしたレクリエーション地区としての整備の方向を打ち出した岩木山南麓地域開発基本計画が策定された。その後、昭和63年には岩木山百沢スキー場のコースの延長とペアリフトが新設され、平成2年には岩木町総合保健センターが完成、平成4年には岩木山総合公園（岩木山麓スポーツコミュニオンパーク）が落成した。土石流が南麓に与えた影響は大きく、土石流が南麓の土地利用の大きな転換点になったと言える。

V おわりに

本稿では、岩木山の東麓と南麓の戦後、特に最近の土地利用の変化について見てきた。昭和38年、国の大規模酪農共同経営の戦略の中で、岩木山麓が酪農・農業の場として着目され、畑作・果樹が加えられ、基本的に「食料供給基地」として期待されていった。しかし、米の生産調整、土石流、気候の違いなどの要因から、現在、東麓はリンゴの生産を中心とした果樹園が大部分を占める農業中心の土地利用、南麓は、常盤野に畑がいくらか見られるが、青少年スポーツセンター、津軽カントリークラブゴルフ場、岩木山総合公園、岩木山百沢スキー場、また温泉もある観光・レジャー中心の土地利用というように全く異なる道を歩んでいることがわかった。

表2 岩木山東・南麓の土地利用変化

	昭和38年以前	現 在
東麓	<ul style="list-style-type: none"> ・等高線100m以下を中心に開拓されている。 ・水田と果樹園が同じ割合で利用されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・等高線300m付近から果樹園と畑が、200m以下から水田が広く利用されている。 ・弥生いこいの村がある。
南麓	<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんど開拓されていない。 ・荒地と森林が目立つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東部では、水田と果樹園に、西部では畑に利用されている。 ・常盤野に町営運動公園、ゴルフ場、岩木青少年スポーツセンターが、百沢には岩木山百沢スキー場、津軽カントリークラブゴルフ場がある。

東麓ではこれからも農地は増加していくのだろうが、南麓では、温泉の老朽化、観光客の季節的な偏り、温泉離れなどのために従来の温泉依存だけでは限界が見えてきている。現在も観光業のために、スキー以外にもスポーツ・レクリエーション施設の整備やイベント作りなどが望まれる中で計画が進められているが、自然環境の問題など課題は多い。

最後に、本稿を作成するに際してご助言を賜った、水野先生、後藤先生と調査及び資料収集

に御協力いただいた、岩木町役場、青森統計事務所の方々に厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- ・石岡在正（1969）：青森県に於ける戦後開拓地 その1＝岩木山麓
弘大地理 5, 47～58
- ・今井六哉・横山 弘（1962）：岩木山南麓開拓地の土地利用 東北地理 4, 109～115
- ・松井 裕（1997）：長野県東部町における巨峰生産の成立と農業経営
弘大地理 33, 42～49
- ・丸山浩明（1987）：浅間山南麓斜面における農業的土地利用の垂直的分化
地理学評論 60A-10, 643～666
- ・丸山浩明（1990）：浅間山北麓における耕境の拡大と農家の垂直的環境利用
地理学評論 63A-2, 74～99
- ・横山 弘（1965）：岩木山麓の開発と集落 弘大地理 1, 1～6